2025 年 3 月 15 日
令和 6 年度第 2 回「危機言語の保存と日琉諸語のプロソディー」合同研究発表会

菅沼健太郎（金沢大学）
suganumak@staff.kanazawa-u.ac.jp

高知県土佐方言の動詞アクセントに関する予備的考察

1. 目的

土佐方言の動詞のアクセントパターンは動詞の種類、および活用によって変わりうる。本発表の目的はそれらのアクセントパターンを生み出すメカニズム（規則と制約）を明らかにすることである。またそれを通して本発表では以下の主張の妥当性について検討する。

(1)　主張：土佐方言の母音語幹動詞はアクセント現象に関連していくつかの特殊な振る舞いをみせる。そのいくつかの特殊な振る舞いは、「母音語幹動詞はアクセントパターンを子音語幹動詞に合わせよ」という均一化制約を想定することで包括的に説明できる[1]。

2. 均一化制約の是非

・本発表で想定する均一化制約：母音語幹動詞が子音語幹動詞にアクセントパターンを合わせる。

既にこのような制約の提案は Yamaguchi (2010) の東京方言の動詞アクセントの研究でも Uniform Exponence 制約（UE 制約）という形でなされている。ただし、Yamaguchi (2010) では「母音語幹が子音語幹にパターンを合わせる」という方向性については言及されていない。

今回このような方向性を想定するのは**子音語幹動詞は母音語幹動詞に比して多数派**であり、少数派が多数派にパターンを合わせる現象は**類推**という形で広くみられるためである（cf. 伏見ら 2004、現代共通日本語：子音語幹 67%、母音語幹 31%）。

実際、母音語幹動詞が子音語幹動詞にパターンを合わせるという現象は「ラ行五段化」という形で諸方言に見られる。

(2)　ラ行五段化（母音語幹動詞の子音語幹動詞化）
　　否定形（西日本）、意思形、命令形（西日本、東北の一部）、可能形のいわゆるら抜き

---

[1] 現時点では土佐方言における動詞活用はこの均一化制約に照らしわせると以下の 3 つのタイプに分かれると考えている（紙幅の都合上、詳細は省略する）。
1. 均一化制約が規則の適用不適用を誘因する活用：過去形、テ形、タラ形、非過去形
2. 均一化制約による何らかの誘因はないが、均一化制約に違反していないアクセントパターンをもつ活用：連用（中止、命令）形、命令形、マス形、希求形（～たい）
3. 均一化制約が働かない活用：否定形など、いわゆる未然形を基盤とする活用。
3 について、発表者は未然形では子音語幹が全て母音語幹になると考えている（例えば“書かん”は kaka-N と分析できる）。このように考えた場合、未然形は母音語幹動詞のみがある体系となり、均一化制約の参照先である子音語幹動詞が存在しないことになる。このように母音語幹動詞のみがあると考えるのは、こうすることで否定形のアクセントパターンを使役形や可能形などの派生形式と同一の規則で説明することができるためである。

言葉（共通語）（井上 1998, 佐々木 2019 など）。

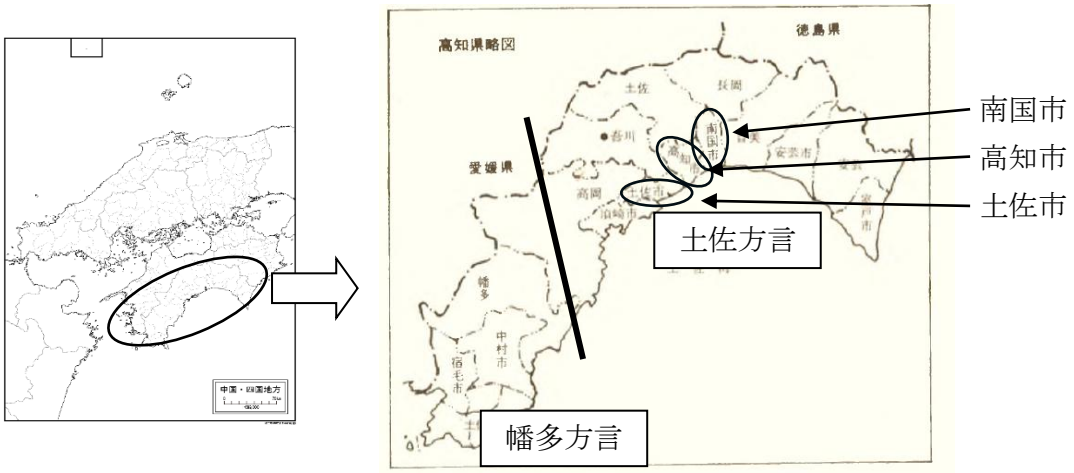
母音語幹動詞 例 mi-“見る”		cf. 子音語幹動詞 ＝五段動詞
五段化前	五段化後[2]	例 tor- “取る”
mi-N	mir-**aN**	tora-**N**
mi-yoo	mir-**oo**	tor-**oo**
mi-ro	mir-**e**	tor-**e**
mir-are-ru	mir-**e**-ru	tor-**e**-ru

(3) a. ラ行五段化：**分節音レベル**で母音語幹が子音語幹にパターンを合わせる。
b. 本発表の均一化制約：**超分節音レベル**で母音語幹が子音語幹にパターンを合わせる。

ただし、ラ行五段化は類推によるある基底構造の定着化であり、本発表の均一化制約は類推による規則・制約の定着化といえる。動詞の音便規則の定着化などが性質が近いかもしれない（cf. 柳田 2014）。

3. 土佐方言のあらまし

3.1. 地理



図は https://www.freemap.jp/ および吉田 (1982: 429) より、境界線は上野 (2020: 3) を参考に加筆。

3.2. アクセント

3.2.1. データソース：2 つ

(4) a. 母語話者 2 名
A 氏：1950 年生まれ、70 代男性、18 歳まで高知県土佐市在住、18 歳から 23 歳までは東京、39 歳から 41 歳までは幡多に在住であったが、現在まで含む残りは土佐市在住。
B 氏：1960 年生まれ、60 代女性、出生から現在まで高知県南国市在住。
現地調査とオンライン調査の併用、2 名とは個別に調査。

[2] ここでは /r/ は語幹側にあると仮定した表示をしている。五段化後に生じた /r/ は語幹側ではなく接辞側にあるとする分析もある（佐々木 2019 など）。

b. 中井 (1997) 『高知市方言アクセント小辞典』

1946 年生まれの高知市育ちの女性に発音を依頼。

2 ~ 8 モーラ動詞（約 1700 語）の過去形と非過去形のアクセントパターン

2 ~ 4 モーラ動詞（36 語）の種々の活用形のアクセントパターン

※ここで言うモーラ数は非過去形時のモーラ数

本発表で扱う範囲について、 2 つのデータは一致した。

3.2.2. アクセント体系：式の対立あり、核は下がり目、核の担い手はモーラ

(5) アクセント体系特徴 3 つ。

a. 式の対立あり。高起（H） vs. 低起（L）

b. 下げ核（’）の有無とその位置の対立あり。低起無核は途中から高くなる（(7c) 参照）。この低起無核は伝統的には 1 モーラ目のみ低く、2 モーラ目から高音調となる（ただし調査の限りでは個人差や文内での出現位置などの条件に左右される）。本発表では一貫して 2 モーラ目から高音調とする表示を採用する。

c. 下げ核の担い手はモーラ

(6) 高低音調決定規則（a→ b の順に適用）

a. 下がり目のあるモーラを高音調に、それ以降を低音調にせよ。

b. 高低音調が未指定のモーラについて、H の語は高音調に、L の語は初頭 1 モーラを低音調に、残りを高音調にせよ。

(7) (5a, b), (6a, b) に関する例

	a. 高起無核	b. 高起有核	c. 低起無核	d. 低起有核
基底形	/^{H}sakana/ “魚”	/^{H}oN’na/ “女”	/^{L}suzume/ “雀”	/^{L}hukuro’o/ “梟”
(6a)	—	oN]na	—	hukuro]o
(6b)	[sakana	[oN]na	su[zume	hu[kuro]o
音声形	[sakana	[oN]na	su[zume	hu[kuro]o

※ [: 高音調開始地点、] : 下降音調開始地点、点線部は高低音調が未指定のモーラを意味する。

(8) (5c) 下げ核の担い手はモーラ、に関する例

a. ^{H}oN’.na “女” → [oN.]na, *[o]N.na

b. ^{L}kyoo’.dai “兄弟” → kyo[o.]dai, *[kyo]o.dai

※促音が下げ核を担う例は未見、本発表では促音は下がり目は担えないと想定。

なお、(7) では下がり目の位置も基底の段階から指定されているとしたが、これは単純名詞に限った話である。今回対象とする**動詞においては動詞語幹や活用によって下がり目の位置は予測可能である。**ゆえに基底形においては位置までは記録されておらず、H/L、および有核無核 [±acc] までが決まっており、**規則によって位置決定**がなされるとここでは考える。

3.2.3. アクセントに関する先行研究の概観

土佐方言は京阪式アクセント体系であり、近世京都方言のアクセント体系をよく残すと言われている。

a. 京阪式アクセント方言の動詞アクセントの研究：Haraguchi (1999) の大阪方言の分析、尾形 (2005) の現代京都方言を主とした分析など、土佐方言を中心としては扱っていない。
b. 土佐方言のアクセント研究：中井 (1997), 上野 (2020) など、動詞アクセントのパターンの記述はあるが派生などの分析はなし。
c. 近世京都の動詞アクセントに関する先行研究：新田 (2005) や上野 (2011) など、通時的な分析が中心。

3.2.4. 動詞体系

(9)　語幹は a ~ c の 3 種類[3]

	1 ~ 2 モーラ	3 モーラ以上
a. 母音語幹動詞 末尾音{e, i}	例 ne-寝, mi-見, sute-捨, oki-起	hazime-始, atume-集
b. 子音語幹動詞 末尾音{k, g, s, w, r, t, n, m, b}	例 kak-書, kag-嗅, das-出, kaw-買, kir-切, kat-勝, sin-死, tanom-頼, hakob-運	ayamar-謝, hatarak-働
c. 変格活用語幹	suru する, kuru 来る[4]	

今回は時間の都合上、語幹のモーラ数が **1～2 モーラの母音語幹、子音語幹の非過去形と過去形**を対象とする（1 モーラ語幹: CV(C)-, 2 モーラ語幹: CVCV(C)-）。

※ 変格活用語幹、および変格活用の“する”に由来する動詞（禁ずる、等）もここでは扱わない。ただし一部言及する部分がある。

※ 受身形など、派生接辞が接続した形式、および複合動詞もここでは扱わない。

※ 非過去形、過去形以外の活用については言及し分析対象とする部分もあるが一部に留める。

※ 今回提案する規則群はいくつかの追加規則や追加の想定が必要な点はあるものの、今回取り扱う以外の語幹や活用におけるアクセントパターンの説明にも有用である。

---

[3] ラ行五段化は一部の活用に見られるのみであり、基本的には現代共通日本語と同等の母音語幹と子音語幹の区別がなされていると考えられる。
ラ行五段化と目される例：使役形、本来母音語幹には -sas, 子音語幹には -as が続くが、 1 モーラ母音語幹では r-as
tabe-**sas**-u “食べさす” mi**r-as**-u “見らす” cf. to**r-as**-u “取らす”

[4] 変格活用の suru と kuru はそれぞれ 1 モーラ母音語幹の H[-acc], L[-acc] と同じパターンとなる。ただし、suru の過去形 sita では長音化は起きないため、後述する均一化制約の例外と解釈する必要がある。このほかに例外とすべきものとしては H[+acc]の母音語幹と解釈できる deki- がある。これの過去形は [de]ki-ta であり、H[+acc] の子音語幹合わせ [de]:ki-ta のように -4 になることはない（[suru, [si]ta, ku[ru, [ki]ta, [de]ki-ru, [de]ki-ta）。

(10)　非過去形、過去形の屈折接辞

a. 非過去形 -(r)u ※ 子音語幹接続時には /r/ は削除される。基底形には /r/ 削除済みのものを表示する。

b. 過去形 -ta

本発表では語幹から屈折接辞末までを「韻律語」、屈折接辞末を「語末」と呼ぶことにする。

(11)　過去形での子音語幹の音便[5]

末尾音	音便規則	例
k, g, s	イ音便（i 挿入、k, g, s 削除）	das- → dai-ta “出した”
w	ウ音便（w の先行母音との融合）	kaw- → ko:-ta“買った”
r, t	促音便（ta のもつ t との同化）	kir- → kit-ta“切った”
n, m, b	撥音便（鼻音化、ta の t との調音点の同化）	tob- → toN-da“飛んだ”

また、C[+voi, -cont] (g, n, m, b) で終わる語幹では ta の t は有声化する。

4. アクセントパターンの観察

(12)　表記についての説明

a. 下がり目が生じるモーラがある場合、そのモーラが語末から何モーラ目に相当するかをマイナス付き数字で示していく。下がり目がない場合は 0 を付す。

b. 高起（H）か低起（L）かについても記載する。語頭モーラに下がり目がある場合は一旦一律 H と記載する。

[5] ik-“行く”は促音便が生じる（it-ta“行った”）。

(13) 1モーラ子音語幹：2パターン[6]

a. パターン1：非過去 H0, 過去 H-3

	非過去形: H0	過去形 H-3
kum-“汲む”	[kum-u	[ku]N-da
ok-“置く”	[ok-u	[o]i-ta
kaw-“買う”	[ka-u	[ko]:-ta
nor-“乗る”	[nor-u	[no]t-ta

b. パターン2：非過去 L0, 過去 L-2（ただし促音便が生じるものは L0）[7]

	非過去形: L0	過去形 L-2
yom-“読む”	yo[m-u	yo[N]-da
das-“出す”	da[s-u	da[i]-ta
nuw-“縫う”	nu[-u	nu[:]-ta
kir-“切る”	ki[r-u	ki[t-ta
ut-u“打つ”	u[t-u	u[t-ta

(14) 1モーラ母音語幹：2パターン

a. パターン1：非過去 H0, 過去（長音化の上）H-3

	非過去形: H0	過去形 H-3[8]
ne-“寝る”	[ne-ru	[ne]:-ta
ni-“煮る、似る”	[ni-ru	[ni]:-ta
ki-“着る”	[ki-ru	[ki]:-ta

b. パターン2：非過去 L0, 過去 H-2（(14a) と異なり長音化は起きない。*de[:]-ta, *[de]:-ta）

	非過去形: L0	過去形 H-2
de-“出る”	de[-ru	[de]-ta
mi-“見る”	mi[-ru	[mi]-ta

[6] (13) については1例のみ別のパターンとして or-u（非過去 H-2, 過去 H-3）が存在する（[o]r-u, [o]t-ta）。

[7] 促音該当部分は声帯振動がなく、実質的な高音調は ta の部分で確認できる。ゆえに kit-[ta と表記する方が本来は正確であるが、ここでは (5b) でも示した表記の一貫性を維持することにする。なお、ki[t-ta の ta は実際には下がり目を担っているが、それが語末ゆえ実現していない、すなわち L-1 である可能性があるが、これに助詞などの後続要素を続けても下がり目は確認されなかった。そのため、これらはやはり L0 と解釈できる。

[8] このような長音化が確認されるのは 1 モーラ母音語幹で非過去形が H0 になるタイプのもののみである。またこれらの語幹での長音化は過去形以外ではテ形とタラ形でみられる（ne:-te, ne:-tara）。

(15)　2モーラ子音語幹：3パターン

a. パターン1：非過去 H0, 過去 H-3

	非過去形: H0	過去形 H-3
hakob-“運ぶ”	[hakob-u	[hako]N-da
okur-“送る”	[okur-u	[oku]t-ta
migak-“磨く”	[migak-u	[miga]i-ta

b. パターン2：非過去 H-3, 過去 H-4（下がり目をもち、その位置が変わらない。）

	非過去形: H-3	過去形 H-4
ugok-“動く”	[u]gok-u	[u]goi-ta
tukur-“作る”	[tu]kur-u	[tu]kut-ta
otos-“落とす”	[o]tos-u	[o]toi-ta

c. パターン3：非過去 L0, 過去 L-3[9]

	非過去形: L0	過去形 L-3
aruk-“歩く”	a[ruk-u	a[ru]i-ta
hair-“入る”	ha[ir-u	ha[i]t-ta
kakus-“隠す”	ka[kus-u	ka[ku]i-ta

(16)　2モーラ母音語幹：2パターン[10]

a. パターン1：非過去 H0, 過去 H-3

	非過去形: H0	過去形 H-3
sute-“捨てる”	[sute-ru	[su]te-ta
ue-“植える”	[ue-ru	[u]e-ta
kari-“借りる”	[kari-ru	[ka]ri-ta

b. パターン2：非過去 H-3, 過去 L-2（下がり目をもち、その位置が変わる。）

	非過去形: H-3	過去形 L-2
tabe-“食べる”	[ta]be-ru	ta[be]-ta
tate-“建てる”	[ta]te-ru	ta[te]-ta
oki-“起きる”	[o]ki-ru	o[ki]-ta

cf. (15b) は下がり目の位置が変わらなかったが、こちらでは変わる。

---

[9] 中井 (1997) を見る限り、パターン3に該当するものはパターン1, 2に比べ少ない。7例ほど。

[10] (16) については1例のみ別のパターンとして deki-ru（非過去 H-3, 過去 H-3）が存在する（[de]ki-ru, [de]ki-ta）。

(17)　(13) ~ (16) のまとめ ※スラッシュの前後は非過去、過去のアクセントパターンを意味する。
H でのみ実現するものは左側、L で実現しうるものは右側に配した。

母音語幹				
1 モーラ: 2 パターン	H0/H-3 [ne-ru / [ne]:-ta （長音化あり）		L0/H-2 de-[ru/[de]-ta	
2 モーラ: 2 パターン	H0/H-3 [sute-ru / [su]te-ta			H-3/L-2 [ta]be-ru/ta[be]-ta

子音語幹				
1 モーラ: 2 パターン	H0/H-3 [kum-u / [ku]N-da		L0/L-2（促音便 L0） yo[m-u/yo[N]-da (ki[r-u/ki[t-ta)	
2 モーラ: 3 パターン	H0/H-3 [hakob-u / [hako]N-da	H-3/H-4 [u]gok-u/[u]goi-ta	L0/L-3 a[ruk-u/a[ru]i-ta	

(18)[11] 非過去形と過去形のアクセント体系のポイント 3 つ。

a. 非過去形は H0, L0, H-3、すなわち下がり目があるか、ないか、あるとしたら -3 のみ、という体系。

b. 過去形は促音便の L0 を除くと、H-4, H-3, H-2, L-2, L-3、すなわち下がり目は原則全てで存在するがその位置が違う、という体系。

c. 母音語幹は以下の 2 点で特殊なふるまいをする。

i. [ne]:-ta の長音化（併せて、[de]-ta は長音化しない。）

ii. [ta]be-ru ~ ta[be]-ta での下がり目のズレ。

5. 分析

5.1. 語幹のアクセント情報の解釈

語幹がもつアクセント情報は活用時のアクセントパターンに影響を与える。

(19)　例：東京方言 [+acc] の語幹と [-acc] の語幹が存在。

[+acc]: tabe-“食べる”, kak-“書く”, [-acc]: sute-“捨てる”, kum-“汲む”

それぞれでアクセントパターンが異なる。

a. 非過去形　tabe’-ru, ka’k-u vs. sute-ru, kum-u

b. 過去形　　ta’be-ta, ka’ita vs. sute-ta, kun-da

c. 仮定（レバ）形　　tabe’-reba, ka’k-eba vs. sute-re’ba, kum-e’ba

土佐方言でも語幹のアクセント情報の推定（H/L [±acc]）から始める。

[11] (18a, b) は 3 モーラ以上でも同様でもある（脚注 13 参照）。

(20)　本発表での解釈

	H[-acc]	H[+acc]	L[-acc]	L[+acc]
母音語幹				
1 モーラ: 2 パターン	H0/H-3 [ne-ru / [ne]:-ta （長音化あり）		L0/H-2 de-[ru/[de]-ta	
2 モーラ: 2 パターン	H0/H-3 [sute-ru / [su]te-ta			H-3/L-2 [ta]be-ru/ta[be]-ta
子音語幹				
1 モーラ: 2 パターン	H0/H-3 [kum-u / [ku]N-da		L0/L-2（促音便 L0） yo[m-u/yo[N]-da (ki[r-u/ki[t-ta)	
2 モーラ: 3 パターン	H0/H-3 [hakob-u / [hako]N-da	H-3/H-4 [u]gok-u/[u]goi-ta	L0/L-3 a[ruk-u/a[ru]i-ta	

(21)　解釈の根拠：非過去形

非過去形：下がり目がある動詞とない動詞がある。

→下がり目は接辞 -(r)u によって生じるのではなく、語幹がもつ情報によって生じている。

→非過去形時に下がり目がない=語幹は [-acc], 下がり目がある＝語幹は [+acc]。

→[-acc] のものは初頭音調から H/L も判断可能。

→[+acc] は語頭に下がり目があるため、H か L か非過去だけでは判断不能（(22)へ）。

(22)　[+acc] は H か L か非過去だけでは判断不能

語幹のもつ情報自体は L だけれども、下がり目が語頭に置かれた結果、L という情報が音声形では実現していない、という可能性あり（以下 b 参照）。

仮の派生

	a. 高起有核	b. 低起有核
	/H[+acc]tabe-ru/	/L[+acc]tabe-ru/
（仮） -3 に下がり目を置け。	ta’be-ru	ta’be-ru
(6a)	[ta]be-ru	[ta]be-ru
(6b)	—	—
音声形	[ta]be-ru	[ta]be-ru

→活用を通してみると、[u]gok-u は常に高く始まる一方、[ta]be-ru は低く始まる場合がある。

非過去形	過去形、テ形、タラ形	連用形での命令
[u]gok-u	[u]goi-ta/te/tara	[ugok-i
[ta]be-ru	ta[be]-ta/te/tara	ta[be-ϕ

→ [u]gok-u は H[+acc]、[ta]be-ru は L[+acc] であり、非過去形では H[+acc] と L [+acc] の中和が起きていると考える。

(23)　(20) 再掲　本発表での解釈

	H[-acc]	H[+acc]	L[-acc]	L[+acc]
母音語幹				
1 モーラ: 2 パターン	H0/H-3 [ne-ru / [ne]:-ta （長音化あり）		L0/H-2 de-[ru/[de]-ta	
2 モーラ: 2 パターン	H0/H-3 [sute-ru / [su]te-ta			H-3/L-2 [ta]be-ru/ta[be]-ta
子音語幹				
1 モーラ: 2 パターン	H0/H-3 [kum-u / [ku]N-da		L0/L-2（促音便 L0） yo[m-u/yo[N]-da (ki[r-u/ki[t-ta)	
2 モーラ: 3 パターン	H0/H-3 [hakob-u / [hako]N-da	H-3/H-4 [u]gok-u/[u]goi-ta	L0/L-3 a[ruk-u/a[ru]i-ta	

(24)　語幹のアクセント情報に関するポイント

母音語幹には H[-acc], L[-acc], L[+acc] の 3 種類が存在し、H[+acc] は存在しない[12]。

子音語幹には H[-acc], L[-acc], H[+acc] の 3 種類が存在し、**L[+acc] は存在しない**。

※これは 2 モーラ動詞までの場合である。3 モーラ以上だと母音語幹でも H[+acc] が現れる[13]。

5.2. 補足　語幹のアクセント情報に関する通時的考察

本発表でいう L[+acc] と H[+acc] は日本語史研究では「2 類」とまとめられる。

(25)　a. L[+acc]: 2 モーラ 2 段動詞第 2 類　例: “建てる”　土佐方言では L[+acc] [ta]te-ru, ta[te]-ta

b. H[+acc]: 3 モーラ 4 段動詞第 2 類　例: “恨む”　土佐方言では H[+acc] [u]ram-u, [u]raN-da

---

[12] 1 例のみの [de]ki-ru を除く。

[13] 3 モーラ以上の場合、母音語幹子音語幹共に H[-acc], H[+acc] そして数は少ないが L[-acc] の語幹が存在する。その一方で L[+acc] は現れない。すなわち、L[+acc] の語幹は 2 モーラの母音語幹に限られることになる。
例

	母音語幹	子音語幹
H[-acc] H0/H-3	[hazime-ru/[hazi]me-ta	[hatarak-u/[hatara]i-ta
H[+acc] H-3/H-4	[atu]me-ru/[a]tume-ta	[aya]mar-u/[aya]mat-ta
L[-acc] L0/L-3	ko[tae-ru/ko[ta]e-ta	ka[kawar-u/ka[kawa]t-ta

H[+acc] の母音語幹では H-4 の [a]tume-ta が伝統的だが、H-3 の [atu]me-ta も許容される。本発表で提案する (31) の [+acc] アクセント規則は [atu]me-ta を予測するが、同時に (42) の均一化制約は伝統的な [a]tume-ta を予測する。中井 (1997) のデータから 3 モーラ語幹で H[+acc] の動詞を計測すると母音語幹動詞は 96 例、子音語幹動詞は 65 例存在した。このように母音語幹動詞の方が幾分多数派を形成していることから均一化制約が弱く働いた可能性がある。

※H[-acc] と H[+acc] は揺れがありどちらのパターンでもありうるという動詞がいくつか存在した（発表者の調査でも同様）。そのような揺れのある動詞もここでは計上している。

これらは平安〜鎌倉時代までは同じ L[-acc] と言えるアクセントパターンであったが、時代を経るごとに互いのパターンに変化が生じた。

(26) 京都方言の (25a, b) の 2 類動詞のアクセントの変遷（木部 2016: 112-113 より）

※ 語末の] は拍内下降、) は弱い下降を意味する。また連体形は室町以降、終止形としても用いられる。

	tateru		uramu	
	終止形	連体形	終止形	連体形
平安	ta[tu]	ta[tu	ura[mu]	ura[mu
鎌倉	ta[tu	ta)tu[ru	u)ra[mu	u)ra[mu
室町	ta[tu	ta]turu	u]ramu	u]ramu

(27) 近世京都（室町以降）における (25a, b) の各活用におけるアクセントパターン

	終止形	過去形	否定形	意志形	禁止形	命令形
3 モーラ 2 段動詞 2 類 =[ta]turu	HLL	LHL	HLL	HLL	HLLL	LF
3 モーラ 4 段動詞 2 類 =[u]ramu	HLL	HLLL	HHLL	HHLL	HLLL	HLL

H: 高音調のモーラ、L: 低音調のモーラ、F: 下降調のモーラ

（データは上野 2011: 327 より）

(28) L[+acc], H[+acc] の成立過程に関する本発表での解釈

a. (25a) [ta]te-ru: 室町時代や近世でも ta[tu のように低起で実現する活用が生存。語幹は L という情報を保持、連体形（新終止形）である ta]turu が下がり目を持つため L[-acc] から L[+acc] に変化。

b. (25b) [u]ram-u: 室町時代や近世ですでに低起で実現する活用がなくなる。L という情報を忘れ、終止連体形ともに下がり目をもつため L[-acc] から H[+acc] に変化。

c. 同じ京阪アクセントをもつ土佐方言では今もそれぞれ L/H[+acc] で保持されている[14]。

[14] 現代京都方言においてはこれらの非過去形はそれぞれ L[-acc], H[-acc] として実現する（tate-[ru, [uram-u データは中井 2002 より、語幹のアクセント情報の解釈は発表者によるもの）。土佐方言の tate-ru, uram-u をそれぞれ L[+acc], H[+acc] とする本発表の想定が近世京都方言にも当てはまるとした場合、現代京都方言で各々が L [-acc], H[-acc]となっているのは、語幹のアクセント情報の内、式の情報を保ったまま無核化した（有標な構造から無標な構造に変化した）ためだ、という説明ができる。この音変化については既に上野 (2011) と新田 (2005) が議論をしている。前者は非過去形以外の活用における音調パターンの相違からの「反発」という観点から、後者は「接続連用形からの類推による無核化」という形で説明を試みている。ここで述べた本発表の無核化という説明は、語幹そのもののアクセント情報に言及する点、tate- のアクセント情報が L[+acc] となっているとする点でこれらの先行研究とは異なる。

5.3. 規則の提案

5.3.1. 前提となる仮定・規則

(29) a. 非過去形、過去形の基底形は /語幹-ru/, /語幹-ta/

b. r 削除規則 r→ φ /C-_（非過去形の -ru の r を削除する規則、派生を示す際は省略しこの規則が適用された形を基底形に表示する。）

c. モーラ形成規則：(C)V はモーラを形成せよ。

d. 音便規則：過去形において、語幹末子音に応じて撥音化、促音化、i 挿入、母音融合等の音変化が語幹末に生じる。

e. モーラ付与：音便規則によって生じた分節音にモーラを付与する。

(30) 派生例

基底形	/ugok-u/	/ugok-ta/	
モーラ形成	$u_{\mu}go_{\mu}k\text{-}u_{\mu}$	$u_{\mu}go_{\mu}\mathbf{k}\text{-}ta_{\mu}$	過去形において k はこの時点ではモーラを形成しない。
音便＆モーラ付与	—	$u_{\mu}go_{\mu}\mathbf{i_{\mu}}\text{-}ta_{\mu}$	過去形では音便によって i が生じ、これにモーラが付与される[15]。

5.3.2. 非過去形の規則（母音語幹・子音語幹含む）

H[-acc]と L[-acc] については特に規則はない。語幹のもつアクセント情報がそのまま高低音調決定規則 (6a, b) の適用を受け実現する。一方の H[+acc], L[+acc] には以下の規則がモーラ形成後働く。

(31) [+acc] アクセント規則： [+acc] の語幹について、語幹次末モーラに下がり目を置け[16][17]。

※語幹末モーラ：接尾辞側の母音を含まない最右端のモーラ

※語幹次末モーラ：語幹末モーラの直前のモーラ

$^{[+acc]}CV_{\mu}\mathbf{CV_{\mu}}\text{-}CV_{\mu} \rightarrow CV_{\mu}\text{'}CV_{\mu}\text{-}CV_{\mu}$

$^{[+acc]}CV_{\mu}\mathbf{CV_{\mu}}C\text{-}V_{\mu} \rightarrow CV_{\mu}\text{'}CV_{\mu}C\text{-}V_{\mu}$　※太字：語幹末モーラ、黄色マーカー：語幹次末モーラ

---

[15] このように本発表では分節音間にモーラ付与タイミングのズレを仮定している。この仮定については Hayes (1989) の weight by position を参考にした。

[16] [u]gok-u の場合、過去形にしても [u]goi-ta のように下がり目の位置は変わらない。このことから下がり目の位置は固定されているとも考えられそうだが、派生形式を見ると [ugo]-kas-u, [ugok-a]re-ru のように下がり目は語幹次末モーラにうつるため、やはり (31) のような規則が必要になる。

[17] このように語幹次末モーラに置こうとする点から、この言語では 2 モーラ強弱フットが下がり目の位置決定において中心的な役割を果たし、さらにフットの右端を形態素境界（語幹末）に可能な限り近づけようとする制約が働くと考えることができる。ただしフットを導入した具体的な規則群については未検討である。

(32)　非過去形の派生（高低音調決定規則 (6a, b) は省略）

a. 母音語幹

基底形	H[-acc] ne-ru	L[-acc] de-ru	L[+acc] tabe-ru
モーラ形成	ne_{μ}-ru_{μ}	de_{μ}-ru_{μ}	$ta_{\mu}be_{\mu}$-ru_{μ}
(31) [+acc] ア規則	—	—	ta_{μ}’be_{μ}-ru_{μ}
音声形	[ne-ru	de-[ru	[ta]be-ru

b. 子音語幹

基底形	H[-acc] kum-u	L[-acc] yom-u	H[+acc] ugok-u
モーラ形成	ku_{μ}m-u_{μ}	yo_{μ}m-u_{μ}	$u_{\mu}go_{\mu}$k-u_{μ}
(31) [+acc] ア規則	—	—	u_{μ}’go_{μ}k-u_{μ}
音声形	[kum-u	yo[m-u	[u]gok-u

結果、下がり目の有無が違う(0 vs. -3) 体系が表出。

5.3.3. 過去形

5.3.3.1. 子音語幹の過去形の規則

(33)　(23) から子音語幹のみを抜粋

子音語幹	H[-acc]	H[+acc]	L[-acc]	
1 モーラ: 2 パターン	H0/H-3 [kum-u / [ku]N-da		L0/L-2(促音便 L0) yo[m-u/yo[N]-da (ki[r-u/ki[t-ta)	
2 モーラ: 3 パターン	H0/H-3 [hakob-u / [hako]N-da	H-3/H-4 [u]gok-u/[u]goi-ta	L0/L-3 a[ruk-u/a[ru]i-ta	

H[+acc] [u]goi-ta は -4。

H/L[-acc] は yo[N]-da の -2 や ki[t-ta の 0 を除くと全て -3。

→ -4 は 以下の (34) ように (31) の規則が音便規則適用前に適用されると考えると説明可能である。

(34)　H[+acc] の過去形の派生　例 [u]goi-ta

基底形	H[+acc] ugok-ta	備考
モーラ形成	$u_{\mu}go_{\mu}$k-ta_{μ}	/k/ はこの時点ではモーラを形成しない。
(31) [+acc] ア規則	u_{μ}’go_{μ}k-ta_{μ}	語幹次末モーラは /u/ と判断される。
音便規則＆モーラ付与	u_{μ}’$go_{\mu}i_{\mu}$-ta_{μ}	音便によって /i/ が生じ、これにモーラが付与される。
音声形	[u]goi-ta	

→ H/L[-acc] では -3 に下がり目を置く規則が働き、-2 や 0 は追加の規則によって生じると考える[18]。

[18] 過去形において -3 に下がり目が生じるのは過去形が連用形に -tari が接続した形に由来するためだと考えられる。連用形では (37) 例 2 で見るように原則 -2 に下がり目が生じる。それに -ta （-tari の現在の形）が続くことで結果として -3 に下がり目が置かれる構造が生み出される。

これらのパターンを導くため、以下の規則群を提案する。これらの規則は音便規則とモーラ付与の後、a から d の順で適用される。

(35) a. **過去形アクセント規則**：語幹に下がり目がない場合、語幹次末モーラに下がり目を置け、該当モーラがない場合は語幹末モーラに置け（cf. Haraguchi 1991、大阪方言）。
※ なお、この規則は -te, -tara においても適用される。

b. **L 下がり目移動規則**：L の語で語頭に下がり目がある場合、下がり目を 1 モーラ後ろにずらせ（cf. 黒木 2019）。この規則は L という情報を体現する余地を残すために適用される。
$\#^{L}\mu'\mu \rightarrow \mu\mu'$

c. 促音下がり目移動規則：無声子音拍（促音）に下がり目がある場合、下がり目を 1 モーラ後ろにずらせ。この規則は無声子音拍が下がり目を担うには不適当であるため適用される。

d. 語末下がり目削除規則：下がり目が韻律語末にある場合、それを削除せよ（cf. 非末端制約 Non-finality, cf. Hyde 2011）。

(36) (35) を踏まえた派生

a. L[-acc]

基底形	L[-acc] /aruk-ta/	L[-acc] /yom-ta/	L[-acc] /kir-ta/
モーラ形成	$a_{\mu}ru_{\mu}k\text{-}ta_{\mu}$	$yo_{\mu}m\text{-}ta_{\mu}$	$ki_{\mu}r\text{-}ta_{\mu}$
(31) [+acc] ア規則	—	—	—
音便規則＆モーラ付与	$a_{\mu}ru_{\mu}i_{\mu}\text{-}ta_{\mu}$	$yo_{\mu}N_{\mu}\text{-}da_{\mu}$	$ki_{\mu}t_{\mu}\text{-}ta_{\mu}$
(35a) 過去ア規則	$a_{\mu}ru_{\mu}'i_{\mu}\text{-}ta_{\mu}$	$yo_{\mu}'N_{\mu}\text{-}da_{\mu}$	$ki_{\mu}'t_{\mu}\text{-}ta_{\mu}$
(35b) L 下がり目移動	—	$yo_{\mu}N_{\mu}'\text{-}da_{\mu}$	$ki_{\mu}t_{\mu}'\text{-}ta_{\mu}$
(35c) 促音下がり目移動	—	—	$ki_{\mu}t_{\mu}\text{-}ta_{\mu}'$
(35d) 語末下がり目削除	—	—	$ki_{\mu}t_{\mu}\text{-}ta_{\mu}$
音声形	a[ru]i-ta	yo[N]-da	ki[t-ta

b. H[-acc]/[+acc]

基底形	H[-acc] /hakob-ta/	H[+acc] /ugok-u/
モーラ形成	$ha_{\mu}ko_{\mu}b\text{-}ta_{\mu}$	$u_{\mu}go_{\mu}k\text{-}ta_{\mu}$
(31) [+acc] ア規則	—	$u_{\mu}'go_{\mu}k\text{-}ta_{\mu}$
音便規則＆モーラ付与	$ha_{\mu}ko_{\mu}N_{\mu}\text{-}da_{\mu}$	$u_{\mu}'go_{\mu}i_{\mu}\text{-}ta_{\mu}$
(35a) 過去ア規則	$ha_{\mu}ko_{\mu}'N_{\mu}\text{-}da_{\mu}$	—（既に下がり目をもつため）
(35b) L 下がり目移動	—	—
(35c) 促音下がり目移動	—	—
(35d) 語末下がり目削除	—	—
音声形	[hako]N-da	[u]goi-ta

(35b, c, d) は他の動詞活用を説明する際にも有用である。以下にその例を 3 つ挙げる。

(37)　例 1 条件形（タラ形）：ta からの下がり目の位置は過去形と同じ。ただし 1 モーラ L[-acc] で促音便が生じるものは L0 ではなく L-2 となる。促音下がり目移動が適用され、さらに過去形と異なり下がり目削除が不適用になるためである。

基底形	L[-acc] /kir-tara/	cf. L[-acc] /kir-ta/
モーラ形成	$ki_{\mu}r\text{-}ta_{\mu}ra_{\mu}$	$ki_{\mu}r\text{-}ta_{\mu}$
(31) [+acc] ア規則	—	—
音便規則＆モーラ付与	$ki_{\mu}t_{\mu}\text{-}ta_{\mu}ra_{\mu}$	$ki_{\mu}t_{\mu}\text{-}ta_{\mu}$
(35a) 過去ア規則	$ki_{\mu}'t_{\mu}\text{-}ta_{\mu}ra_{\mu}$	$ki_{\mu}'t_{\mu}\text{-}ta_{\mu}$
(35b) L 下がり目移動規則	$ki_{\mu}t_{\mu}'\text{-}ta_{\mu}ra_{\mu}$	$ki_{\mu}t_{\mu}'\text{-}ta_{\mu}$
(35c) 促音下がり目規則	$ki_{\mu}t_{\mu}\text{-}ta_{\mu}'ra_{\mu}$	$ki_{\mu}t_{\mu}\text{-}ta_{\mu}'$
(35d) 語末下がり目削除	—	$ki_{\mu}t_{\mu}\text{-}ta_{\mu}$
音声形	ki[t-ta]ra	ki[t-ta

例 2 連用中止形（～し、そして）: 接尾辞 -i は [-acc] の語幹に接続する場合、韻律語次末モーラに下がり目を与える[19]。しかし L [-acc] の語で全体が 2 モーラの場合は L0 で実現する。これは下がり目移動と下がり目削除が適用されるためだと説明できる。

基底形	H[-acc] /kum-i/	L[-acc] 全体 2 モーラ /yom-i/	L[-acc] 全体 3 モーラ /aruk-i/
モーラ形成	$ku_{\mu}m\text{-}i_{\mu}$	$yo_{\mu}m\text{-}i_{\mu}$	$a_{\mu}ru_{\mu}k\text{-}i_{\mu}$
(31) [+acc] ア規則	—	—	—
音便規則＆モーラ付与	—	—	—
連用形ア規則（韻律語次末モーラに下がり目を付与せよ。）	$ku_{\mu}'m\text{-}i_{\mu}$	$yo_{\mu}'m\text{-}i_{\mu}$	$a_{\mu}ru_{\mu}'k\text{-}i_{\mu}$
(35b) L 下がり目移動規則	—	$yo_{\mu}m\text{-}i_{\mu}'$	—
(35c) 促音下がり目規則	—	—	—
(35d) 語末下がり目削除	—	$yo_{\mu}m\text{-}i_{\mu}$	—
音声形	[ku]m-i 下がり目は -2。	yo[m-i 下がり目は生じない[20]。	a[ru]k-i 下がり目は -2。

例 3 a[Nzuru“案ずる”と se[ssuru“接する”の過去形：本発表では“する”に由来するため除外しているが、aNzurun の過去形は aN’zita で -3 に下がり目が置かれる。これは過去形ア規則で -3 に下がり目が置かれたためだと説明できる。一方、sessuru の過去形では sessi’ta のように -2 に下がり目が生じる。これは過去形ア規則でいったん -3 である促音部分に下がり目が置かれるが、その後促音下がり目移動により後ろにずれたためだと考えることができる（ses’sita → sessi’ta）。

5.3.3.2. 母音語幹動詞の過去形：2 つの問題点

(38)　(20) 再掲　本発表での解釈

母音語幹	H[-acc]		L[-acc]	L[+acc]
1 モーラ: 2 パターン	H0/H-3 [ne-ru / [ne]:-ta （長音化あり）		L0/H-2 de-[ru/[de]-ta	
2 モーラ: 2 パターン	H0/H-3 [sute-ru / [su]te-ta			H-3/L-2 [ta]be-ru/ta[be]-ta

[19] この例 2 で示しているのは子音語幹の派生である。母音語幹の連用中止形では (22) でも示したように音形をもった接尾辞は接続しない（例 sute-ϕ“捨て”）。この -ϕ は子音語幹における接尾辞 -i 同様 [-acc] の語幹に接続する場合、韻律語次末モーラに下がり目を与える。ただし 1 モーラ母音語幹では一律 H[-acc] とせよとする追加規則が必要になる（例 $/^{H[-acc]}$ne-ϕ / → [ne, $/^{L[-acc]}$de-ϕ / → [de）。

[20] 下がり目が削除されていることはこの連用中止形に -yo’r-u （音声形では -yu’u）を接続させた進行形（～している）のアクセントパターンから確認できる。-yo’r-u は o’r-u に由来し下がり目をもつ。しかし、直前に現れる連用中止形が下がり目をもつ場合、-yo’r-u の下がり目は実現しない（[ku]miyuu, a[ru]kiyuu）。これは直前に下がり目がある場合、-yo’r-u のもつ下がり目を削除せよという規則が働いたためだと考えられる。ここで yom-i が実際には m-i に下がり目をもつとした場合、予測される進行相形のアクセントパターンは yo[mi]yuu だが、実際には yo[miyu]u ないし yomi[yu]u であり、-yu’u の下がり目が実現する形となる。

2 モーラ語幹の [su]te-ta と ta[be]-ta はこれまでの規則群で説明可能。

(39)　[su]te-ta と ta[be]-ta の派生

基底形	H[-acc] /sute-ta/	L[+acc] tabe-ta
モーラ形成	$su_{\mu}te_{\mu}$-ta_{μ}	$ta_{\mu}be_{\mu}$-ta_{μ}
(31) [+acc] ア規則	—	ta_{μ}’be_{μ}-ta_{μ}
音便規則＆モーラ付与	—	—
(35a) 過去ア規則	su_{μ}’te_{μ}-ta_{μ}	—（既に下がり目をもつため）
(35b) L 下がり目移動	—	$ta_{\mu}be_{\mu}$’-ta_{μ}
(35c) 促音下がり目移動	—	—
(35d) 語末下がり目削除	—	—
音声形	[su]te-ta	ta[be]-ta

しかし、1 モーラの母音語幹に対して現在の規則群は [ne]-ta, de-[ta を予測する。さらに、(31) → (35b) という規則順は L[+acc] tabe- の非過去形において ta[be]-ru を予測してしまう。

(40)　母音語幹動詞に対する誤った派生

基底形	H[-acc] /ne-ta/	L[-acc] de-ta	L[+acc] tabe-ru 非過去形
モーラ形成	ne_{μ}-ta_{μ}	de_{μ}-ta_{μ}	$ta_{\mu}be_{\mu}$-ru_{μ}
(31) [+acc] ア規則	—	—	ta_{μ}’be_{μ}-ru_{μ}
音便規則＆モーラ付与	—	—	—
(35a) 過去ア規則	ne_{μ}’-ta_{μ}	de_{μ}’-ta_{μ}	—（非過去形であるため）
(35b) L 下がり目移動	—	de_{μ}-ta_{μ}’	$ta_{\mu}be_{\mu}$’-ru_{μ}
(35c) 促音下がり目移動	—	—	—
(35d) 語末下がり目削除	—	de_{μ}-ta_{μ}	—
音声形	*[ne]-ta 実際は [ne]:-ta	*de-[ta 実際は [de]-ta	*ta[be]-ru 実際は [ta]be-ru

[ne]:-ta を説明するためには以下の長音化規則を提案する必要がある。

(41)　長音化規則：過去形において 1 モーラ H[-acc] 母音語幹を長音化せよ（CV→CVV）。

問題点 1：長音化規則はなぜ適用されるのか？※上野 (2011: 346) では「体系の強制により」とあるが具体的な説明なし。

また、[de]-ta、[ta]be-ru を説明するためには 1 モーラ L[-acc] の過去形、および 2 モーラ L[+acc] の非過去形では L 下がり目移動の適用がブロックされると考える必要がある。

問題点 2：ブロックの要因とは？

5.3.3.3.3. 母音語幹動詞の過去形：均一化制約による包括的説明

上野 (2011: 346) は [ne]:-ta のような長音化に対して「体系の強制により」と述べている。上野 (2011) のいう体系的強制というのは類推のことであるため、[ne]:-ta は類推によって成立したとしていることになる。この考えを踏まえると、他の H [-acc] が過去形時に H-3 になることから、それに合わせるため長音化し H-3 の [ne]:-ta になると考えることができる。

このように考えると下がり目が生じる他の活用においても /ne-/ は長音化しアクセントパターンを他の H[-acc] に合わせることが期待される。しかし、長音化は過去形（およびテ形とタラ形）のみで見られる。例えば連用形においては [su]te-ϕ“捨て”、[ku]m-i“汲み”のように H[-acc] では H-2 の形で下がり目が生じるが、同じ H[-acc] である /ne-ϕ/ は [ne“寝（、そして）”のように H0 で実現し、*[ne]: のように長音化し下がり目が -2 に生じることはない。

連用形 [ne と過去形 [ne]:-ta の違いとしては、音節数が等しい子音語幹形式の有無が挙げられる。[ne（/ne-ϕ/） は 1 音節の H[-acc] であり、そのような形式は子音語幹には存在しない。[ku]m-i“汲み”のように必ず 2 音節以上になるためである。その一方で [ne]:-ta（/ne-ta/）は 2 音節の H[-acc] であり、そのような形式は [ku]N-da という形で子音語幹にも存在する。この点が過去形で類推による長音化が起き、連用形でそれが起きないことの原因であるとすると、**音節数の等しさが類推に関わっていることになる。**

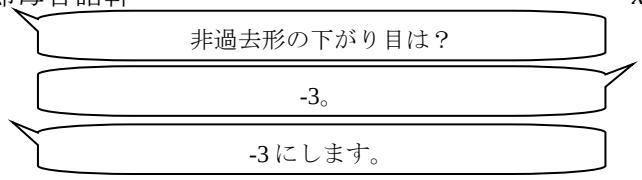
音節数という観点を踏まえ、[de]-ta, [ta]be-ru を見てみると、これらも子音語幹と同じ位置に下がり目を置いていることがわかる。2 音節 L[-acc] の [de]-ta は -2 に置いており、同じ 2 音節 L[-acc] である yo[N]-da と同じ位置に置いている。また 3 音節 L[+acc] の [ta]be-ru はアクセント情報こそ違うものの、非過去形にて下がり目をもつもう一つの存在である 3 音節 H[+acc] の [u]gok-u と同じ -3 に下がり目を置いている。

このような共通性を踏まえ、以下のような均一化制約が働いていると考えると、(41) に挙げた問題を包括的に解決することができる。

(42) 均一化制約：ある活用内において、母音語幹動詞は下がり目を置く場合、自身と韻律語全体の音節数が等しい子音語幹動詞と同じ位置に下がり目を置け。もし子音語幹動詞において語幹のもつアクセント情報によって下がり目の位置が異なる場合、自身と（韻律語全体の音節数が等しくかつ）同じアクセント情報（H/L[±acc]）をもつ子音語幹動詞と同じ位置に下がり目を置け。

波線部イメージ

x 音節母音語幹　　*x* 音節子音語幹



点線部イメージ

x 音節母音語幹

過去形の下がり目は？

アクセント情報によって変わります。

H[-acc] -3, L[-acc] -2…

アクセント情報が同じものに合わせます。

x 音節子音語幹

※アクセント情報を参照する必要が出た際、子音語幹に同じアクセント情報のものがない場合、この制約は働かない。

L[+acc] は？

L[+acc] はそもそもないです。

参照先なしで了解です。

この制約を満たす構造の形成は促進され、またこの制約に違反する構造を形成する規則の適用はブロックされる。ゆえに、/ne-ta/ では長音化規則が適用され、[de]-ta、[ta]be-ru では L 下がり目移動の適用がブロックされる。

(43)　波線部：[ta]be-ru （3 音節）が関与的

3 音節母音語幹

非過去形の下がり目は？

-3。

-3 にします。

3 音節子音語幹

全体が 3σ の非過去の体系
下がり目はあるか、ないか、あるとしたら -3 のみ。
H[+acc] [u]gok-u -3
H[-acc] [hakob-u 0

(44)　波線部： [n]eː-ta, [de]-ta が関与的

2 音節母音語幹

過去形の下がり目は？

アクセント情報によって変わります。

H[-acc] -3, L[-acc] -2…

アクセント情報が同じものに合わせます。

H[-acc] ne-ta 長音化し -3 の[ne]:-ta に。

L[-acc] de-ta -2 の [de]-ta。

2 音節子音語幹

全体が 2 σ の過去形の体系
-3, -2 アクセント情報によって変わる。
H[-acc] [ku]n-da -3
L[-acc] yo[N]-da -2

なお、ta[be]-ta は (44) 同様自身と同じアクセント情報のものを参照しようとするが、L[+acc] は子音語幹にはない（(24) 参照）。ゆえに均一化制約による規則適用のブロックがなく、L 下がり目移動により ta[be]-ta となる。

(45)　波線部：ta[be]-ta が関与的

3 音節母音語幹

過去形の下がり目は？

アクセント情報によって変わります。

H[-acc] -3, H[+acc] -4, L[-acc] -3

L[+acc] は？

L[+acc] はそもそもないです。

参照先なしで了解です。

2 音節子音語幹

全体が 3σ の過去形の体系
L[+acc] は子音語幹にない。
H[-acc] H-3 [hako]N-da
H[+acc] H-4 [u]goi-ta
L[-acc] L-3 a[ru]i-ta

(46)

	H[-acc] /ne-ta/	L[-acc] de-ta	L[+acc] tabe-ru 非過去形
モーラ形成	ne_{μ}-ta_{μ}	de_{μ}-ta_{μ}	$ta_{\mu}be_{\mu}$-ru_{μ}
(31) [+acc] ア規則	—	—	ta_{μ}'be_{μ}-ru_{μ}
音便規則＆モーラ付与	—	—	—
(35a) 過去ア規則	ne_{μ}' -ta_{μ}	de_{μ}'-ta_{μ}	—（非過去形であるため）
(41) 長音化規則	ne_{μ}':-ta_{μ}　（均一化制約を満たすため適用）	—	—
(35b) L 下がり目移動	—	—（均一化制約によるブロック）	—（均一化制約によるブロック）
(35c) 促音下がり目移動	—	—	—
(35d) 語末下がり目削除	—	—	—
音声形	[ne]:-ta	[de]-ta	[ta]be-ru

5.3.3.4. 補足：動詞の量的な差

中井(1997) の動詞のデータを発表者が計測。

※広範なデータ量のため、一般的な動詞は網羅されていると仮定。

いずれも参照先は参照者より多数派を形成。

(47)　土佐方言における動詞の内訳（変格活用語幹、およびそれに由来する動詞を除く[21]。）

		母音語幹	子音語幹
1 モーラ語幹	H[-acc]	5 例 e.g., [ne-ru, [ne]:-ta	64 例　e.g., [kum-u, [ku]N-da
	L[-acc]	2 例 e.g., de-[ru, [de]-ta	非促音便 34 例 e.g, yo[m-u, yo[N]-da 促音便 22 例 e.g., ki[r-u, ki[t-ta
2 モーラ語幹	H[-acc]	46 例 e.g., [sute-ru, [su]te-ta	105 例 e.g., [migak-u, [miga]i-ta
	L[-acc]	0	7 例 e.g., a[ruk-u, a[ru]i-ta
	H[+acc]	0	145 例 e.g., [u]gok-u, [u]goi-ta
	L[+acc]	60 例 e.g., [ta]be-ru, ta[be]-ta	0 例

過去形時　過去形時　非過去形時

過去形時
参照先がないため均一化
制約が働かない。

6. 今後の課題

今回の均一化制約は“やりすぎ”？

(48)[22] a. [ta]be-ru：通時的な音変化によって成立（5.2. 節参照）。通時的に均一化制約が働き [u]gok-u に影響され [ta]be-ru になったわけではない。「通時的な要因から L 下がり目移動は非過去形には適用されない」という説明の方が無難？

b. [de]-ta ：そもそも 1 モーラ L[-acc] 母音語幹は自身の L という情報を体現することに固執しない性質をもつようである（例 連用中止形 [de という H0 で実現）。このような性質があることから語頭モーラに下がり目が置かれることが許容された？（均一化制約による要求ではない。）[23]

c. [ne]:-ta：均一化制約の想定が必要？

---

[21] 加えて、それぞれ 1 例のみ存在する 1 モーラ H[+acc]子音語幹 [o]r-u および、2 モーラ H[+acc] 母音語幹である [de]ki-ru を除く（脚注 6, 10 参照）。また子音語幹の中には（音節わけの分析にも左右されうるが）H[+acc] [u].goi.ta“動いた”に対する H [+acc] to:i.-ta.“通した”や、L[-acc] a.[ru]i.-ta に対する L[-acc] hait.ta.“入った”など、同じアクセント情報と語幹のモーラ数をもちながら、音節数が他とは異なる動詞も存在する。(47) の表はそのようなものも含んでしまっているため、今後音節数にも依拠した形で計測しなおす必要がある。

[22] 3 モーラ母音語幹について、脚注 13 では H[+acc] の過去形 [a]tume-ta が均一化制約に従っている形だとしたが、これも均一化制約は無関係で、H[-acc] との中和回避のため生じたという説明が可能である。H[+acc] atume-ta に (31) の [+acc] アクセント規則が適用されると [atu]me-ta となる。その一方、H[-acc] の hazime-ta では (35a) の過去形アクセント規則により [hazi]me-ta となり、H[+acc] と H[-acc] で下がり目の位置が中和してしまう。これを避けるために下がり目を前にずらし [a]tume-ta としたと説明できる（そしてより若い世代では中和回避という要求が薄れ [atu]me-ta が許容されているといえる）。

[23] このような性質は現代京都方言等でもみられる。現代京都方言では 1 モーラ L[-acc] 母音語幹と子音語幹の過去形はそれぞれ [de]-ta (H-2), yoN[-da (L0) となる（データは中井 2002 より、語幹のアクセント情報の解釈は発表者によるもの）。このように [de]-ta の L が実現しない一方、yo[N]-da, yoN-[da では L が実現しているという二者間の差異は、仮に最適性理論における制約のランキングを仮定するならば、ID L Cstem > ID past acc > ID L V stem のようなランキングによって説明を与えられる。
・ID L Cstem: 子音語幹の L という情報を音声形でも体現せよ。
・ID past acc: 過去形における下がり目を音声形で体現せよ。
・ID L Vstem: 母音語幹の L という情報を音声形でも体現せよ。

1 モーラ H[-acc] 母音語幹にのみ均一化制約は働く、としたほうが無難かもしれない。ただ、そのように考えた場合、なぜ過去形（とテ形とタラ形）にのみ、かつ 1 モーラ H[-acc] 母音語幹にのみ局所的に働くのか理由付けが必要となる。理由付けができない限り過去形にのみ限定するのは不自然であり、動詞パラダイム全体に働いていると考えるべきである。そのように考えると非過去形も均一化制約で説明できる範疇に入る（そうすると今回の“やりすぎバージョン”でもよいことになる？）。

参照文献

Haraguchi, Shosuke (1999) Accent. In: Natsuko Tsujimura (ed.) *The Handbook of Japanese Linguistics*, 1–30. Malden, MA: Blackwell Publishers.

Hayes, Bruce (1989) Compensatory Lengthening in Moraic Phonology. *Linguistic Inquiry* 2: 253–306.

Hyde, Brett (2011) Extrametricality and Non-finality. In: Marc van Oostendorp, Colin J. Ewan, Elizabeth Hume and Keren Rice (eds.) *The Blackwell Companion to Phonology*, 1027-1051. Malden, MA: Blackwell Publishers.

Kisseberth, Charles W. (1970) On the functional unity of phonological rules. *Linguistic Inquiry* 1: 291–306.

Yamaguchi, Kyoko (2010) The Difference in Accentuation between the Present and the Past Tenses of Verbs in Japanese. *Journal of the Phonetic Society of Japan* 14: 1-10.

井上史雄 (1998)『日本語ウォッチング』東京：岩波書店.

上野和昭 (2011)『平曲譜本による近世京都アクセントの史的研究』東京: 早稲田大学出版部.

上野智子（編）(2020)『日本のことばシリーズ 39 高知県のことば』東京：明治書院.

尾形佳助 (2005) 「京阪式動詞音調論再考」『文林』39: 1-81.

木部暢子 (2016)「アクセント史」高山倫明・木部暢子・松森晶子・早田輝洋・前田広幸（編）『音韻史』69‑118. 東京: 岩波書店.

黒木邦彦 (2021)「辨別的ピッチ變動の位置を決める動詞語幹の最終子音」日本語学会 2021 年度春季大会ワークショップ. オンライン開催. 2021 年 10 月 30 日.

佐々木冠 (2019)「不規則性の衰退―日本語方言の動詞形態法で起きていること―」林由華・衣畑智秀・木部暢子（編）『フィールドと文献からみる日琉諸語の系統と歴史』229–258. 東京: 開拓社.

中井幸比古 (1997)『高知市方言アクセント小辞典―方言アクセント小辞典 (1)―』神戸市：神戸市外国語大学.

中井幸比古 (2002)『京阪系アクセント辞典』東京：勉誠出版.

新田哲夫 (2005) 「京阪式アクセントにおける動詞の類推変化について」『国語学』55(1): 16-30.

伏見貴夫・伊集院睦雄・佐久間尚子・辰巳格・春原則子・小森憲治郎・新貝尚子 (2004) 「神経心理学の新しい展開　認知神経心理学における最近のトピック　語の文法とその障害」『神経心理学』20 (1): 51–62.

柳田征司 (2014)『日本語の歴史 5 上 音便の千年紀』東京: 武蔵野書院.

吉田則夫 (1982)「高知県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一（編）『講座方言学 8―中国・四国地方の方言―』425–449. 東京：国書刊行会.